

5. 一肉用鶏農場での死廃率増加事例とその対策

鳥取県倉吉家畜保健衛生所 ^{ますだ}○増田 ^{つねゆき}恒幸 ^{つか}柄 ^{ゆうこ}裕子

【はじめに】

管内の肉用鶏農場（ウインドレス鶏舎 14 棟、6,200～8,400 羽/鶏舎）にて、平成 27 年 4 月に死廃鶏の増加が見られた。病性鑑定の実施および飼養状況について聞き取りを行い、次回入雛鶏からワクチン接種方法を変更したところ、死廃鶏数の改善が認められたため、その概要を報告する。

【発生状況】

平成 27 年 4 月に 4 週齢以降の鶏群にて死廃鶏が増加したため当所に病性鑑定依頼があった。複数回病性鑑定を実施するも脚弱や筋胃糜爛など病態は様々であったが、35 日齢以降の鶏についてファブリキウス嚢（F 嚢）が萎縮している個体が複数認められた（4 羽/10 羽）。一部、病原性大腸菌も分離されており、薬剤感受性に基づき抗生剤の使用を指示したが、改善は認められなかった。最終的に総死廃鶏数は 10,272 羽に上り、鶏舎別では 7 鶏舎で 800 羽以上の死廃鶏が認められた。今回のロットから伝染性ファブリキウス嚢病（IBD）ワクチンを弱毒タイプから中等毒タイプのものへ変更しており、14 日齢で接種していた。なお当該農場ではワクチンや飼料などについて親会社が一括して管理している。

【対策】

F 嚢萎縮が認められたため、中等毒ワクチンの副反応を疑い、農場の管理獣医師と協議し、次回入雛群より IBD ワクチンプログラムを変更した。6 鶏舎では中等毒ワクチンは 16 日齢で接種、残りの 8 鶏舎では弱毒ワクチンを 14 日および 21 日齢で接種した。IBD 抗体価を 1 週間毎に測定した。

【結果】

中等毒ワクチン接種群では接種後 10 日以降で、弱毒ワクチン接種群では 2 回目の接種 13 日後に抗体価の上昇が認められた。最終的な総死廃鶏数は 7,318 羽で、800 羽以上の死廃鶏が発生したのは 1 鶏舎のみであった。

【まとめ】

IBD 中等毒ワクチンは強毒株に対する有効性が高いものの、鶏の F 嚢に対する病原性が確認されており一過性に免疫抑制を引き起こすことが知られている。発生状況から本事例は中等毒ワクチン接種による影響が考えられた。農場、管理獣医師と再度協議し、IBD ワクチンについては弱毒タイプの 2 回接種へ変更することにした。ワクチン変更後、発生農場において大きな事故は発生していない。近年、管内では高病原性 IBD を始め IBD の発生は確認されていないため、地域や農場の疾病流行リスクに合わせたワクチン接種が重要と考える。